

生き続ける親友

私は猫町倶楽部という読書会を主宰している。13年前にこの読書会を作るきっかけを与えてくれたのは大



最後の読書
山本多津也

Pがいなくなった世界を想い、そんな中、Pから急に温泉に行こうと連絡があった。いよいよだ、これが最後の旅行になるかもしれない。二つ返事を返したその夜、眠れない頭で考えた。Pがいなければ私の人生は全く違ったものになっていただ

ろう。少なからずPという存在が、私の現在の一端を担っていると言える。ということは私という生の中にはPがおり、もしPがこの世からいなくなったとしてもやはり、私の生の中には依然としてPが生きているのではないか。生きている私の中にPはいる。私はPと一緒に生きている。今もこれからも。

人生の最後に読みたい本は何かと考えたとき、国木田独歩の『忘れえぬ人々』という短編が思い浮かんだ。無名の小説家がある晩旅先で偶然泊まり合わせた、これまた無名の画家と短い会話を交わす話だ。会話の中で小説家は、家族や友人知人でさえない、忘れてしまっても決して不義理にならないわけでもないのになぜかずっと心に残っている、名前も知らない人たちに思いを馳せる。「われと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天

の一方地の一角に享けて悠々たる行路をたどり、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、(中略)そのときは実に我もなければ他もない」

私の中にPが生きているように、この世のすべての人もまた、大勢の他者と分かちがたく生きている。家族、友人はもちろんのこと、名前も忘れてしまった人や日々の中ですれ違ったただの名前も知らない人。彼らが私の中に生きているように、私がこの世からいなくなっても、私もまた彼らの中に生き続けるだろう。私は私だが、同時に無数の他者でもあるのだ。

『忘れえぬ人々』は、いつかたつた一人この世を離れ、新しい世界に旅立つ瞬間の孤独な心を、ほのかな灯りでそっと照らしてくれるだろう。灯りの先にはきつと私と共に生き続ける、忘れえぬ大勢の人達の姿が、温かく映し出されている。

やまと・たつと日本最大規模の読書会「猫町倶楽部」主宰、「読書会入門」

マガジンの虎

30年前に見た名レースの熱気

武和田亀 岐阜の笠松競馬場から前年に移籍し、中央の強豪馬を圧倒したオグリは日本人の判官びいきを刺激し、空前の競馬ブームが起きた。スターホースには試練が待ち構えていた。馬主の事情で転売され、そのとき高額の売却金が発生した。この秋、オグリは過酷な連闘を強いられ、ファンには、高額なトレード金を回収するためのロケーションと映った。

秋競馬

が佳境を迎えている。3歳の一流馬が夏を越して成長し、実績ある古馬に挑戦する。もともとスリリングな季節だ。「優駿」(中央競馬ピーアール・センター)11月号の特集は「秋GI元年」のドラマだ。まず現時点で、実績にぐわえ容姿により、日本競馬の頂点に立つ4歳牝馬アーモンドアイに焦点を当てる。

悲劇

令和元年、秋の主役を冒頭で紹介した後に、30年前の平成元年を賑わした、秋の名レースが紹介される。天皇賞(秋)、エリザベス女王杯、マイルチャンピオンシップ、ジャパンカップの4戦だ。30年といえは、ずいぶん昔だ。なのに、どのレースも結果だけでなく、観客が発散する熱気までも覚えている。主役はオグリキヤップだ(牝馬限定のエリ女は除く)。

あの年の秋に、彼の走りを見たから、私たちは30年も競馬を観戦し馬券を買いつつ、それを改めて確認した。